

Title	矢内原勝・小田英郎編 アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開
Sub Title	
Author	服部, 伸六
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.1 (1990. 4) ,p.195- 201
JaLC DOI	10.14991/001.19900401-0195
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0195

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

矢内原勝・小田英郎編

『アフリカ・ラテンアメリカ関係の
史的展開』

（A5版，252頁，平凡社，1989年）

矢内原・小田両教授の編になる本書について私の読後感を章別に述べて書評に代えたいと思う。

パン・アフリカニズムの起原

第一章に序論として小田氏がアフリカ・ラテンアメリカ関係史の概観を書かれている。そこで強調されていることは、アフリカと中南米地域とを視野に入れての歴史を研究するという試みが極めて珍しい試みであるという点である。おそらく日本では未だかつて無かった分野であろうという認識である。欧米においても、個々の奴隷貿易を調べた研究とか、南米や、北米での奴隷労働が果たした役割についての研究は多く見られる。しかし、それが現代の時点から見た場合の概念を掴むには、かなりの学問的なエネルギーが要求されるだろう。慶應義塾地域研究センターが、この点に着目して研究対象に選ばれた着眼には敬意を表したいと思う。奴隷貿易の展開に伴う海を隔てた両社会の相互依存と、その移り変りを後づけることは、現代世界を理解するために避けて通れない道標であることに間ちがないからである。

両大陸の近親関係が、今からはほぼ400年まゝに奴隷の渡航という、いわば《負》の結びつき（小田論文）によって再開されることになった。アフリカ黒人にとっては、それは《ブラック・ディヤスポラ》のはじまりであり、南米の植民者にとっては、経済発展の基盤となるものであ

った。

しかるに20世紀になるとアフリカ黒人の世界に独立のチャンスがめぐって来て、黒人のアイデンティティを求める運動が湧き起って来た。その風潮を大きく扇動した思想運動としてパン・アフリカニズムがあったのだ。このパン・アフリカニズムの運動が、じつは母国から連れ出された奴隷の子孫であるカリブ海出身のジョルジュ・パドモアなどのような優れた黒人の良心によって進められていたことを、じつは私は余り重点的には関心を持っていなかったのであるが、本書第8章の小田論文によって詳しく知ることが出来た。ガーナのエンクルマも、またパリで黒人運動の中心となった《黒人学生》たちも、このカリブ起原のパン・アフリカ運動に強く刺戟されていたことを教えられたのだった。

パン・アフリカニズムは、しかしアフリカ諸国の独立や、OAUの創設によってその生命を終ったのではなく、1974年タンザニアのニエレレ大統領の主催で行なわれた第6回パン・アフリカ会議に引継がれたばかりでなく、北米アメリカの黒人運動の精神にも引き継がれていることを小田氏は鋭く指摘している。

いや、もっと枠組みを広げてみることも出来るかもしれない。それはキューバのアンゴラへの派兵まで、パン・アフリカニズムの流れの中で捉えられるのではないか、という認識である。キューバのアンゴラ派兵は、旧宗主国であるフランスがチャードの内戦などに干渉したケースとは全く異なった性質のものである。

何故キューバは5万もの大軍をアンゴラに投入したのか。もちろん、ソ連からの要請があったことも考慮に入れねばならぬが、ただそれだけでは片手落ちである。そこには、黒人の祖国アフリカへの共感と、パン・アフリカニズムの思想的な基盤があったことを忘れてはならない。そのことを本書の第10章で青木一能氏が示唆している。協同研究の成果でなければ達し得ない結論であろうと私は思う。このキューバの一石によって、ナミビアのさしも長い独立の成果は

為し遂げ得たのだ。それは単にアフリカ大陸の出来ごとには止まらないで、今後も世界ひっくり返るための国際関係に連動して行くことであろう。

奴隷貿易の実像

第2章の《大西洋奴隷貿易のアフリカへの影響》という矢内原論文は、本書の基本をなす論考である。

17世紀から19世紀末葉まで続けられた黒人のアメリカ大陸への移動のことを奴隷貿易と呼ぶが、1,000万人を超える黒人奴隷の移住がアフリカ側に与えた影響について、ここで詳しく研究されている。

先ず、人口問題である。それについては、アフリカから輸出された奴隷の正確な数が問題となるが、この点について欧米の研究者の間にも異論が多く実数は明確でないことが紹介される。ほぼ1,000万人から1,500万人の数であったであろうことは推定できるとされている。

しかし、その数もさることながら、実質的に問題となるのは、この人口移動が与えたアフリカの影響であろう。矢内原氏が特にこの点について突っ込んだ調査を重ねられているのは、氏の経済学者としての知識と能力が物を言っていると感じられるが、もし奴隷が無かったとすれば、現在みられるようなアフリカとは別なアフリカが実現することになったであろうか、という設問につなげてみると、事の重大さが理解されるだろう。というのは人口の減少ではなくて、増大に向けての大きな力となったであろう人間たちの存在は、人的資本の蓄積要因となって働き、生産組織の大幅な進歩と、教育制度の拡大を促し、アフリカは経済的に早くから発展し得たとも想像できるからである。

人間の世界には大昔から奴隷制は存在していた。ギリシア文明の発達の下敷きになったのは戦争で捕獲された辺境の人間たちであったことには疑問の余地はない。また中世のヨーロッパの封建制の下支えをしたのは、農奴に等しい農

民たちであっただろう。そう考えてみると、アフリカにも一時栄えたことのある王さまたちがヨーロッパの奴隷商人に隷属する墜落した権力者にならなかったとしたら、経済的にもっと違った展望が開けたかもしれない。

矢内原氏はギニア湾岸のオールド・カラバーに17世紀初期に定着したエフィク族の例を上げて、アフリカが経験した経済の質的な変化（あるいは墜落）を追求しておられる。白人の到着までは平和な漁民であった土族は、白人奴隷商人の到来によってアフリカ側の奴隷商人に成り下ってしまった。アフリカ内の生産向上に役立つ筈であった奴隷労働の持主をひっ捉えて白人商人に引き渡す中間業者に転業してしまったのである。

矢内原氏によると、西アフリカ内に秘密結社のような、外部からは窺い知ることの出来ない組織が出来上っていたということを知って、かつて『黒人売買の歴史』という本を書いたことがある私は、いささか面喰った。というのは、あの本を書いた時点では、私が用いた資料には、そのような研究は見当らなかったからである。あの本を私が書いたのは、すでに20年近くも以前のことなので、その後、世に出た最近の研究の成果は取り込むことはできなかったのだ。矢内原論文は、このような新しい研究の上に成り立っているのである。

そこで、考えさせられることは、奴隷貿易もまた商業一般と何ら異なるところのない人間の商売のいとなみであったという、まさに平凡な事実である。現在進行中の貿易も、やはり過去の奴隷貿易と同じものではないのかという感想を抱かざるを得ない。奴隷貿易を特殊なものとして歴史の棚に上げてしまってはならないという事実を、本書を読みながら思い知らされたのだった。

その証拠に、ブラジルで解放された元奴隷の中には海を超えて故国に戻り自らが奴隷商人になり、富を得て、奴隷が商品にならなくなると、他の商売に手を出すことになったのである。私

がかつて西アフリカの港町で知り合った、ポルトガル人の姓を持った半黒のメチソは、じつにその子孫だったのだ。

新大陸での奴隷たち とアフリカ文化

西欧人がアフリカ征服に乗り出したときの動機のひとつに黒人をキリストの教えで天国へ導いてやろうというものがあった。それがただの征服の戦略だったのか、ただのタテマエだったのか、はたまた善意の産物だったのかは知る由もないが、キリスト教の布教が一応の成功を納めたことは認めざるを得ない。今でも、アフリカの西海岸には敬虔な信者たちが数多くいるからである。

しかし、黒人奴隷たちへの布教は、キリスト教の教義がアフリカ人の宗教的伝統と結合するという形で奴隷社会の中に溶け込んで行った。魂の救済というキリスト教宣教師の説教は、現実に合わせて嵌めることになる、奴隷の解放に行きつかざるを得ないので、じつに矛盾きわまる側面があった。だが、そのような矛盾があるにせよ、奴隷も一個の人間である以上、日常のささやかな楽しみがあったはず。《アフリカ的特色を多分に持つ娯楽と宗教行為》とならざるを得なかった。20世紀の後半に世界を風靡することになるアフリカンリズムは、この底辺から生れ出て来たものであろう。本書の第3章の《ジャマイカ・プランテーション奴隷の生活》(西出敬一氏)は、ジャマイカの菜園で働かされた奴隷たちの《生きざま》を追った好篇である。

第5章の石井陽一氏の《ラテンアメリカにおける黒人社会の形成とアフロ・アメリカニズム》と題する一篇も、同じように奴隷たちの日常から発生して行った新しい混血文化について研究を深めたものである。ただ異なるところは、前者が文化とか宗教という個人の日常を視野に入れているのに、この石井論文ではアメリカに持ち込まれたアフリカ風の社会のあり方に重点

が置かれている点であらう。それも解放後の黒人社会の成り立ちの分析が主題となっている。

ラテンアメリカで最もアフリカ系人口の多いのは、カリブ海の島の総計を除けば、ブラジルである。ブラジルは、奴隷制廃止の点ではいちばん遅れていたが、人種差別を行なわないという《人種民主主義》の点では他に先んじていた。この聞き慣れない言葉は、石井陽一氏によれば『大邸宅と奴隷小屋』という著作のある文化人類学者、ジルベルト・フレイレの言い出したものであるという。フレイレは北米の大学に学んでいるので、自国ブラジルの人種混合の社会とアメリカ合衆国のそれとの差異を比較することになったのだらうと、石井論文は論じている。

私もアフリカ体験で、ポルトガル人あるいはブラジルから来たポルトガル人が黒人社会と親密に溶け合っていたことを知っている。英国人やフランス人が原地黒人との間に超え難い障壁を礎いているのを見て、ポルトガル人には人種偏見がないと私は結論していたのだが、このところの石井氏の解説を読んで合点がいったのである。遅くまで奴隷制に固執したことが逆にポルトガル人の人種優越感に根ざす偏見をとり除いていたのだという見方である。

石井論文は、しかし、この人種民主主義の存在を疑うというもうひとつの議論も紹介している。ブラジルに人種偏見が存在することは疑う余地はない、という意見である。

人種偏見があるかないかということは、見る人によって、また時と場所とによって、さまざまな差異が生ずるだろうから、科学的な観察の対象とするには不適である。主観的で文学的な観察になる惧れが多分にある。従ってフレイレのような文学的表現で一応くくるのが適当かもしれない。

しかし、ブラジルが人種問題に関しては世界切っの先進国であるという客観的な事実は疑いえないであらう。国内に多数のアフロディヤスポラを抱えているからのことであらうが、このような現実即してブラジルが1988年の新憲

法で人種差別の排除に実効のある条項を盛りこんでいるということは、人権問題が世界の大きな声になっている今日、未来へ向けての挑戦として評価しなければならないだろう。

人種差別と混血

そこで順序が逆になってしまったが、現代のアフロアメリカ文化の誕生を可能にした奴隷制の廃止と奴隷の解放の歴史を取り上げている乗浩子（よつや・ひろこ）氏の論文に立ち返えることにする。

この論文では、奴隷貿易と奴隷制の廃止の歴史が簡潔にまとめられる。英国が約一世紀に亘ってこの悪習に立ち向ったのは、単に人道的な見地からばかりでなく、現実の経済上の国益をはかるためであったことはよく知られている。英国は海軍力を使って大西洋上で奴隷船を拿捕し、英領（シエラレオネ）のフリータウンに連行して裁判にかけるなどの手段に討えたが、完全に奴隷制が終息し、解放が実現したのは100年近くも経った1888年のことであった。この時間差は言うまでもなく、産業革命によって早く近代化した英国経済と、遅れて工業化に向ったラテンアメリカ諸国の経済格差の故であることも周知のとおりである。

乗論文はこの事実を踏まえてラテンアメリカ諸国における奴隷制の廃止と解放の歴史を辿って、ベネズエラの場合とブラジルの場合という代表的な解放の歴史を跡づけている。

では、解放された後の状況はどうなったのか、ここで再び登場するのが前記ジルベルト・フレイレの思想である。彼は農園主と奴隷との血縁関係による温情主義的家父長制社会としてブラジルの世界を捉え、これを熱帯ポルトガル文明と名づけ、ブラジルを《人種デモクラシー》の国というイメージで浮び上らせた。この点、北のアングロ・サクソンのアメリカとは極立った差異が目立つ。それは、南方的なポルトガル人の性格と、北方民族である戦闘的なヴァイキン

グの子孫の性格とからくるニュアンスの違いがあるのかもしれないが、資本主義の発達程度から来る差違とも考えられる。しかし、いずれにしても《実際の検証は困難である》とするのが当を得ているのであろう。

ブラジルで混血が盛んに行なわれ、ムラードが増加して行ったとしても、現状では依然として社会の底辺には黒人が多いという図式は変わらないし、今後も黒人が国の上層までのし上るには時間を要するかもしれない。

アフリカのセネガル前大統領サンゴールはかつて日本を訪問したあと、《日本の教訓》と題する講演の中で、日本文化は混血の結果だとした上で、混血が多彩な文化を生み、国を隆盛にすると説いたことがあるが、日本で混血が大量に行なわれたとすれば、主としてそれは縄文期から弥生期にかけての時期で、その後は朝鮮半島から政治難民によって文化を豊かにした奈良飛鳥朝時代までであろう。それから千年を経て今日の単一民族となっていることを考えると、混血から繁栄の文化に至る道程は遠いと考えねばならない。ブラジルの混血文化の完成にも相当の時間を要することだろう。

以上は本書の第4章として編まれている乗浩子氏の《ラテンアメリカにおける奴隷解放》という論文に即しての私の読後感であるが、論旨の筋が非常に分り易く説得力がある。

アフリカ合衆国の夢のあとさき

次に本書の第6章である長嶋佳子氏の論文《カリブ海の黒人意識のうねり》と、第7章および第8章のパン・アフリカニズムについての、2章に亘る小田英郎氏の労作を取り上げることにしたい。いずれも、アフリカ黒人が海を渡って到着した最初のカリブ海の島々が研究の対象となっているので、これをひとつに取りまとめて読むのが便利だからである。

この地域はアフリカ系黒人の人口比がラテンアメリカ内で、いちばん高い。長嶋さんが掲げ

ている表によると、黒人系人口比は平均で78%であるという。その中で抜きんでて多いのはハイチの99.9%である。最初の上陸地でありかつ人口比が高いというカリブ海の島々は、その故に奴隷貿易の聖地であると言っていいかもしれない。聖地という表現は、いささか妥当を欠くかもしれないが、エチオピアへの帰還の願望が激烈であったという長嶋氏の記述をみれば、あながちの外れではないかもしれない。というのは、セネガルのシェイク・アンタ・ディオブの説くところによれば、アフリカ黒人の原流はエチオピアないしエジプトのファラオであったこともあるクシュ王朝であったとされているからである。ディオブによれば、エチオピアに発した黒人で西方スーダンに向ったものが、今日のバンバラやウーロフ族の祖先に、南方に向ったものがバンツ族の祖先となったとされているから、黒人奴隷の祖先を迎ればエチオピアへ行き着くことになる。

従ってカリブ海に起ったエスニック・アイデンティティの運動が《エチオピアニズム》という標語でイメージ化されたとしても不思議ではないといえる。長嶋氏の記述によると、ヘンリーと言うジャマイカ人はエチオピアのハイレ・セラシェ皇帝がメシアの再来であると確信して《アフリカ改革教会》なるものを設立して多くの信者を集め、自らも1955年にエチオピアを訪問したという。つまり、自分たちのアイデンティティを母国アフリカに求め、結果その原流の地エチオピアに帰属しようとしたということだ。

小田論文で取り上げられるパン・アフリカニズムのうねりも、ひっきようするに、この運動の流れに浮び上る虹のようなものであろう。《虹のような》という表現を用いたのは、その夢がまだ実現されてはいないという意味を強調したかったからであるが、実現されていないから虹のように消えてしまうと考えられては誤解を招くおそれもある。ひょっとしたら100年後には、あの悲劇の元ガーナ大統領エンクルマの

称えた《アフリカ合衆国》が出来ているかもしれない。ECの統合が、やがて実現しそうであり、また東欧世界の眼ぐるましい変化と《ヨーロッパ共通の家》という新造語が日を見ることになった今日、パン・アフリカニズムの夢が実現する日があることも、あながち夢ではないかもしれないからだ。

協道にそれてしまった。道を元に戻して、小田氏の《移行期のパン・アフリカニズムとジョージ・パドモア》の章を読むことにしよう。ここでは、アフリカのナショナリズムとパン・アフリカニズムの根が同一であると認識した移行期のパン・アフリカニストたち、シルヴェスター・ウィリアムズやマーカス・ガーヴィの思想と行動とが紹介されている。この2人ともカリブ海の出身で《アフリカへの帰還》が夢である。この夢は一時期、実現しかける。1914年にUNIA（万国黒人改善協会—Universal Negro Improvement Association and African Communities）がガーヴィの努力で設立され、1920年のその第1回国際大会がニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンで開かれたとき、前途は明るく展望された。25,000人ももの代表の出席を得たからである。

しかし、その希望の灯も、運動の帰結とも言うべき《アフリカへの帰還》運動が、内は内部の意見対立と、外はヨーロッパの植民地主義国の圧迫によって《リベリアへの植民地計画》は挫折に追い込まれ、1940年にガーヴィが失意のうちにロンドンで客死するに及んで、遂に消えてしまう。

その灯が再びともるのは第2次大戦の終りを待たねばならない。ガーナの初代大統領クワメ・エンクルマはガーヴィの理想に鼓舞されて、再びパン・アフリカニズムの灯を高々と掲げることとなる。私は、ガーナの首都アクラでエンクルマが主宰したパン・アフリカ大会が開かれた日に、その場に居合わせたものだ。緑の多いアクラの街に吊るされたアフリカの国ぐにの旗で輝く光景を記憶しているが、しかし間もなく、

そのエンクルマも中国訪問の留守の間に軍のクーデタで政権を追われてしまった。エンクルマは遂に故国の土を踏むこともかなわず、ギニアに亡命して、数年ののち病死してしまったし、もう1人のアフリカ統合の運動家、ケニアのケニアッタも今は鬼籍。統合の灯は消えたかに見える。

アフリカ最後の植民地の独立

第9章と第10章は現代に舞台を移すことになる。第9章の執筆者は井上一明氏である。

《現代国際関係におけるアフリカ・ラテンアメリカ関係の動態》というのがそのテーマで、奴隷貿易の時代と西欧の植民地時代とを通じて《自らの主体性を否定された負の体験》をさせられたという消極的な意味でアフリカとラテンアメリカは共通性を持っていると冒頭で規定される。

では、この両地域はその後、積極的な意味を持つ関係を現在確立できているだろうか、というのが、本論文の検証の主題とされる。

第2次大戦後の世界が、大戦の苦い教訓を踏まえての反省から、旧植民地の大半を独立させることになり、その後は一般にネオ・コロニヤリズムと呼ばれる関係を西欧の旧宗主国と結ぶことになった。1960年前後の期間の出来事である。ところが、片方の当事者である西欧諸国において欧州統合の動きが生じたので、アフリカばかりでなく、カリブ海諸国やアジア太平洋を含む地域との関係の枠組みを規定するものとしてロメ協定が締結されることになった。井上氏はこの枠組みの中で重要な役割を果たした国として、南アフリカ共和国とナイジェリア、およびラテンアメリカのブラジルを選んで相互の関係を検討されている。

南アフリカは周知のように国際的孤立の状態に追いこまれたので、その外部への発展の出口としてブラジルを選び、1981年の時点で総額9,800万ドル(推定)の投資を行なったという。

南アフリカの投資の主体となったのは、アングロ・アメリカン社で、同社は南アフリカでの実績を生かして主として鉱業の分野に投資を行なった。しかし、南アフリカのラテンアメリカへの進出は経済の分野だけに止まらず、政治・外交の面でも攻勢をかけている。ところが、この攻勢にも、南アフリカのアパルトヘイトに対する国際与論の非難と、同時に進行したラテンアメリカ側の民主化の波により、ラテンアメリカ側から南アフリカとの外交関係を断絶するものが出て来て、後退を余儀なくされることになった。

一方、ナイジェリアとラテンアメリカ、その中でも、なかんずくブラジルとの関係は、ナイジェリアが産油国となるに及んで、ナイジェリアにとって石油の輸出先として重要なものとなった。ブラジル側からみると、ナイジェリアは、先進国ほど精密化されていないブラジルの工業生産品の輸出先として重要性を帯びることになった。それには、ナイジェリアの海岸地方に活動する元解放奴隷の子孫の活力が支えとなっているようである。ブラジルはナイジェリアのほかにも、その経済発展の触手を伸ばしつつあり、将来注意すべき展開を予測させるものがある。井上論文はテーマを、経済の細部にまで立ち入りながら要領よくまとめているが、ただ、ひとつだけ気になる点を挙げさせて貰えば、《多数支配アフリカ諸国》という用語の使い方である。アフリカ人、すなわち黒人を指しているものと理解されるが、用語に一考を願いたいところである。

最後に控えているのが、第10章の《アンゴラとキューバ》の章である。もっとも最近のアフリカ内大事件にキューバが関わったこの事件は、しかし、ようやく終息することになって、昨年来のナミビア総選挙が国連監視下で行なわれ、今年の3月には憲法制定の国民議会がひらかれるまでに進展した。

キューバがアンゴラ内戦に介入してアンゴラの現政権の優勢の支えとなった経緯については

大方の記憶に新しいところなので記述は省略するが、アメリカとソ連とがこの内戦から手を引くことになったという米ソのデタントが、南アフリカとキューバの双方の戦力の引揚げにつながり、ようやくナミビアの独立が可能になった情勢の変化は、アフリカに対する《白人支配の終焉》として捉えるならば、20世紀の末尾に放たれた大ヒットと言えるだろう。

《共産主義の終焉》とも言われる世界史の節目に当る1989年に、キューバの兵力の引上げが開始され、アフリカもラテンアメリカも新時代へと移行することになるだろう。そこで、新たな展望が予想される今日、本書が両大陸の関係を総括し得たことの意義は極めて大きいと言える。

服部伸六
(詩人, 評論家)